

新島襄と森永太一郎—誕生より帰国まで

森 永 長壹郎

まえがき

新島襄¹⁾は1843（天保14）年2月12日、江戸神田安中藩に生まれた。幼名を七五三太という。彼は1875（明治8）年、京都に同志社英学校を開き、今日の同志社大学の基礎を築く。森永太一郎²⁾は1865（慶応元）年6月17日、肥前国松浦郡伊万里町、現在の佐賀県伊万里市に生まれた。両親は伊左衛門と名づけたが、6歳のとき父親は死亡し、母親は再婚、太一郎は親戚を転々とした。8歳で伯父山崎文左衛門³⁾の養子となり山崎太一郎として入籍している。彼は1899年、東京に森永西洋菓子製造所を創業し、森永製菓株式会社の基礎をなした。2人ともアメリカ滞在中、「ジヨウ」と呼ばれていた。

新島襄も森永太一郎もアメリカで洗礼を受けたクリスチャンである。2人は何故アメリカに渡り、何故クリスチャンになったのか。2人の生活に何があったのか。森永を調べていると、クリスチャンになるにあたり「けれ共未だどうも自分自身の救い主として〔キリストに〕跪く事が出来ない」（森永太一郎*My Faith And Experience*、『信仰実験談』p.8、以下『実験談』とする）という太一郎（筆者と同じ「森永」なので、太一郎とする）の苦しみを読んだとき、新島が洗礼を受ける前に、彼にもこのような悩み、苦しみがあったのだろうかと思ふ。次に、「『このジャップに何一つ用事を割当ててはならぬ』と工場長が一同に申し含めた」（『菓子新報青年版』昭和10年9月10日）と太一郎は差別を受けたというが、アメリカに滞在中、新島はこのような差別を受けたことがあったのか、この二つについて調べ論じようと思ふ。

I. 両家の宗教

太一郎は父方も母方も西本願寺派の仏教徒で、朝夕、仏の前で南無阿彌陀仏と唱えないと食事をさせてもらえない家庭に育った（『実験談』 p.1）。特に母方の祖母⁴⁾は篤信家（『菓子新報青年版』、昭和8年5月10日、以下『新報』とする）であった。彼女は太一郎に「阿弥陀仏の話を聞かせたり、正信偈（しょうしんげ）（浄土真宗の経文）や和賛（仏教をテーマにした音階のある詩歌）」（『パイオニアの歩み』現代語版、p.25、以下『パイオニア』とする）を教えた。

新島家の宗教も仏教であった。「忘れずに述べておかななくてはならないことは、父と祖父がいかに熱心な異教の崇拜者だったかということ」（『新島襄全集』⑩ p.24、以下『全集』とする）を新島は述べている。祖母の葬式は、「仏教のお経」（同上）をあげ、おごそかな儀式であったことが書かれている。

このような家庭に育った2人がクリスチャンになる過程を見てみよう。

II. 渡米

1885（明治18）年21歳の太一郎は九谷焼を輸出する横浜の道谷商店⁵⁾に勤めた。しかし1年余りで閉店せざるを得なくなった。閉店と同時に、太一郎は綿平⁶⁾に勤務する。荷主の綿谷氏に懇望されたからである。道谷商店には早朝から債権者が詰め掛けた。道谷に信用されていた太一郎は恩義を感じ、知らぬ振りができなかった。「そして私には野心勃勃として渡米の念が萌しつつある、ままよ、毒を喰はば皿までだ、好し！」（『新報』昭和9年8月10日）ということで、道谷を債権者から守り、破産差し押さえから遁れるために、打ち合わせの結果、「一時遁れの策」（同上）として太一郎の渡米を口実にすることにした。「匿名合資の形式で売れる見込みのない同店〔道谷〕の残品を荷造りして米国行きの船に積み込んだ。しかし斯様なローズ物は容易に売れる見込みがないので、綿平商店の品を数千円

商館に売り込んだことにして心ならずも」(『森永五十五年史』、p.15) 九谷焼を船に積み出した。この際、綿平には、「重々私 [太郎] の罪を詫び、品代金は私が弁済する事を書面を以って通知」(同上) したのであった。

渡米したのは1888(明治21)年の夏ころであった。太郎はイギリス船アラビック号の3等船客として乗り込んだ。24歳、妻と長女を日本に残しての渡米であった。

一方、新島である。彼には沢山の本を貸してくれた1人の友人(恐らく杉田簾卿)(『全集』⑩ p.385)がいた。借りた本の中に和訳のロビンソン・クルーソー物語⁷⁾があった。新島はこの本により「外国を訪れてみたい」(同上)という欲望をかきたてられたのである。ほかに漢訳のアメリカに関する書物などがあったが、なかでも新島の「好奇心を最もかきたてたのは、・・・2,3冊のキリスト教の書物」(同上)であった。新島は「今すぐにでも福音が自由にのべ伝えられている土地、そしてそこから神の御言葉を教える教師たちが派遣されてくる土地を訪れてみたい」(同上、p.38)と思った。

新島は1864(元治元)年3月12日、北方交易に向かう快風丸⁸⁾に乗って品川を出帆し、函館に向かった。1864年6月14日、米船ベルリン号⁹⁾(セイヴォリー船長¹⁰⁾)に乗り込み、翌日、函館を出帆し、1864年7月9日、シャーンハイでワイルド・ローバー号¹¹⁾(テイラー船長¹²⁾)に乗り換え、1865年7月20日にボストンに入港した。新島は22歳であった。

Ⅲ. 渡米後洗礼を受けるまで

1. 太郎の場合

太郎のイギリス船アラビック号は10数日後ハワイに到着した。彼は上陸しホノルル市中を見学している。ハワイを出港後間もなく、「支那人の3等船室に天然痘患者が発生」(『新報』昭和9年8月10日)したため、サンフランシスコ到着後、3等船客は「エンジェル島」(同上)の近く繋船していた消毒船に移され、半月余りを海上で費やした。

サンフランシスコ上陸後、太郎は日原昌造(横浜正金銀行桑港支店長)

を頼りとする。日原の勧めで「富家商店に委託販売」と決めたが、その富家氏に委託したのが全然外れ（『新報』昭和9年9月10日）となった。富家は商人ではなく、東洋画家で美術研究の目的で渡米していたのである。太一郎は少しでも英語が出来たらと悔しがった。その頃知り合ったのが佐藤文次（後の大倉文次で日本橋の大文洋行経営者）である。佐藤を通訳として販路開拓の緒についたが、「万事兆なるかな、既に時機を失し」（同上）ていた。横浜の道谷商店には債権者がつめかけ、太一郎が正金銀行から前借して送った金も債権者に発見され道谷は窮地に陥っていた。そこで太一郎はサンフランシスコにある残品をオークションで売り払い、正金銀行の負債を返済し、余った金は道谷に送ったので、彼は「1銭たりとも身に持たない素寒貧」（同上）となった。日原には失敗後も世話になり、「日曜日毎にご馳走を受けて」（同上）いたが、日原は正金銀行頭取原六郎¹³⁾の失脚に殉じて辞職帰朝した。

「ルンペン同様」（同上）になった太一郎は無料宿泊所である日本人ミッション教会の厄介になりながら「雇人口入所」（同上）に行行って「奉公口」を探しては、窓拭き、家の掃除や皿洗いなど「最下級な仕事」（同上）をしながら毎日を送っていた。ある新春のこと、奉公先の地下室で薄い毛布1枚で寝泊りしながら「奴隷の有様で数か月」（同上）働いていたが、痔を患った。手術してもらったが、働かなければ医者への支払いが出来ないので、仕事は休まなかった。またあるときは、サンフランシスコから200マイルあるロックレンタウンにあるホテルでコックをしていたときのことである。ひょう疽に罹り、「右手の拇指が鶏卵大」（『新報』昭和9年10月10日）に腫れ上がった。ブランデーかぶどう酒を飲んで手術をしようとのことであつたが、禁酒していた太一郎は麻酔なしで2、30分の手術を受けた。

渡米して1年後、サンフランシスコからオークランド¹⁴⁾に移り、「相変わらず米人家庭の下層な労働に雇われて」（『新報』昭和10年3月10日）二転三転しているうちに、「図らずも洵によい家庭に住み込んだ」（同上）、とあるが、『パイオニア』では「学校の用務員」（p.25）とある。主人はスカンジナビア人で、夫人はアイルランド生まれのクリスチャンであつた。この老主婦は太一郎が「黄色人種であるにもかかわらず、家族同様の愛情を注

ぎ」(『パイオニア』、p.25)、彼に親切であった。主人の靴を奉公人に磨かせることはなく、夫人が磨いていた。夫人の偽りのない親切と立派な行いは太郎にとっては自分を反省する動機を与えられることとなった。「夫人の崇高な気風と親切、誠に親身も及ばざる厚き同情は私の欠点だらけの性質を反省せしめた」(『新報』昭和10年3月10日)という。

「親身も及ばざる厚き同情は私の欠点だらけの性質」と述べ、太郎は自分自身のことにも触れている。祖父の太兵衛¹⁵⁾は有田焼の陶器問屋・森永商店と魚問屋・壹州屋を営み、伊万里湾の漁業権を一手に握る網元でもあった。太兵衛は陶器と魚を取り扱うのに手が回らなくなり、魚問屋と網元の本締株を妻の実弟に譲った。父・常次郎は太郎が6歳のときに亡くなった。父は伊万里焼の問屋であったが、事業が不振となり、父の死後、家の財産は動産も不動産も債権者の手に渡ってしまった。母・きくは再婚し、太郎は親類縁者の家を転々としていた。この頃、母方の祖母・チカが、「陰に陽に、絶えず面倒を見てくれ、その熱烈なる愛撫と保護」(『森永五十五年史』、p.2)のもとに成長した。チカは、「鍋島藩の家老職納富某の長女で、漢学の素養があり厳格な性質の持主で、西本願寺派の信仰の篤い賢婦人」(同上、pp.2~3)であった。太郎のおば・イシが山崎文左衛門に嫁したとき戸籍を調べてみると、太郎のことは親戚に相談なしに山崎家の実子として太郎という名前で勝手に入籍してあることが分かった。「明治5年生まれとして入籍してあって、実年齢とは8歳もちがっていた。27歳ころまでは山崎姓」(『新報』昭和10年3月10日)を名乗っていた。太郎の祖父や父がつけた名前は「伊左衛門」(同上)であった。命名の理由は郷里の伊万里に、天保時代に「犬塚伊左衛門¹⁶⁾」(同上)という人がいて、江戸で伊万里焼を扱う鍋島家の御用商人として成功していた。その人にあやかるようにとの命名であった。太郎は12歳の春まで自分の名前さえ正確に書けなかった。そこでおばたちが相談し、山崎の世話で「同じ町内で書籍と文房具を商う盛観堂こと川久保商店の住み込み店員」(『菓商』p.19)になった。住み込むに当たっては、奉公の余暇に手習い、学問をさせてもらうことにし、報酬として年2斗の米を納める約束であった。「店主の川久保雄平¹⁷⁾は42歳、・・・伊万里小学校の開校当時、そこの教師を務

めた」(同上)が、当時夜だけ裏二階を塾にして」(同上)教えていた。太一郎はそこで「13歳の春まで」(『パイオニア』p.5)習字や学問をさせてもらっていた。13歳のとき、山崎おじより50銭もらい、こんにゃくや野菜などの行商に出る。15歳でおじの家を出て、伊万里焼の間屋(堀七商店¹⁸⁾)に奉公。太一郎は自分の名前が戸籍上、「太一郎」になっていることは「15、6歳まで知らなかった」(同上)という。18歳のとき、おじの代理で大阪に出張¹⁹⁾。19歳で東京出張²⁰⁾。これを機に文左衛門も出資していた横浜の合資会社・有田屋²¹⁾で働く。ここは伊万里焼の営業所であった。20歳で小坂せきと結婚。21歳で道谷商店(店主・道谷太七)に入店。「是非自分の店で働いてくれ」(『新報』昭和9年7月10日)と懇望された。この店は横浜本町通りに九谷焼を外国商館に売り込んでいた。セールス係にまわされた太一郎は、早速商館へ出向き、実績をあげ、売り込み番頭に抜擢された。一時はかなり繁盛したのであるが、失敗におわった。理由は「内助に宜しきを得なかった」(同上)からである。道谷の妻は半狂乱になるほどの「嫉妬心の強い」(同上)女性であった。店主の道谷が商館へ出向くと、妻は小僧に後をつけさせた。小僧が途中で怪しいことがあったかの如く報告すると、小僧をほめ、道谷が戻ると、妻は店頭であれ、帳場であれ、お構い無しにわめきたて、時には「泣いて武者ぶりつくという狂乱」(同上)振りであった。営業不振を助けようと、太一郎夫妻は金策のため帰郷したが、不成功に終わった。帰りは神戸まで船で帰り、神戸から横浜まで歩いて帰ったという。

もともと「他人の店に奉公することは自分の性質上不適当」(『森永五十五年史』、p.13)であると太一郎は思っていたので、「資金を調達してたとへ露天商ひ又は行商でもして、独立の生活」(同上)をしたいと考えていた。道谷商店が絶望的になったとき、九谷焼の綿平商店が店を出した。太一郎は懇望されて、綿平の横浜支店を預かることになった。

話をアメリカ生活に戻す。孤児として育ったために、性質が曲がっている。その性質を鍛え直し、人間らしくなりたいと、アメリカでは「一層熱心に朝夕、南無阿弥陀仏を唱え、仏教の経文を読んで努めた」(『実験談』p.4)が、自分の心を鍛え直すことができない。世話になっている家庭の夫

人は日曜日毎に教会に聖書と賛美歌を持って出席しているが、太郎には一度も教会に行くことを勧めたことはなかった。しかし行いを通して彼を「神の道に進むように導いてくれた」（『パイオニア』 p.25）のはこの夫人であったと彼は回想している。

当時、日本人ミッション教会には、ハリス牧師²²⁾や美山貫一²³⁾という牧師がいて太郎は彼らに勧められたことがあった。しかし太郎はキリスト教に「絶対反対」（『実験談』 p.4）であった。郷里の伊万里では、彼が育ったころのキリスト教は悪魔、外道の宗教として排斥されていたからである。太郎はここで12、3歳の頃の出来事を語る。長崎から来た宣教師からマタイ伝やマルコ伝をもらった。それをおばに見せると、「邪宗門の本なんて汚らわしい。早速焼き捨てて仕舞え」（同上、p.5）と言われ、すぐに焼き捨てたことがあった。そういうわけで、仏教精神で心を鍛え直そうとして努力するが何の効果もなく、安心もできない。「煩悶が絶えなかった。唯苦しむばかり」（同上）であったと太郎は告白する。

太郎はふと思いついた。自分はキリスト教の「教えの内容を知らない」（同上）「食わず嫌い」（同上）であったことに気付いた。「若し基督教が左様な邪宗であるならば、そんな基督教に依ってアメリカの様な文明国が支配されて居る事はあるまい。これはひとつ自分自身聖書を調べて見様、それが最も近道であり、又ヒョットとして自分の曲れる性質を鍛え直す事の出来る力を与えてくれる事がありはしないか」（同上）という気持ちが起こった。

太郎は四福音書を通読し、最初に感激したのは、「父よこの罪を彼らに負わせ給う勿れ、彼らはその為すところを知らんのだ」という「麗しい祈り」（同上、p.7）であった。十字架の上であって、「己れを極度に悩まし辱め、苦しめ、遂には死にまで至らしめた人々のためになした」（同上）祈りを「麗しい」と思ったのである。

次に、使徒行伝を読み驚いたのは「基督は神の約束に依って蘇り給いし所の基督教救い主」（同上）であることだった。

第2の感激はペテロの話である。「カヤパの庭に於いて知らずと三度までも否定したペテロが・・・イエスを神の独り子救い主」（同上、p.8）と

証した場面であった。しかし太一郎は「けれ共未だどうしても自分自身の救い主として跪く事が出来ない」(同上)という。このような葛藤が新島にはあったのだろうか。これが筆者の第1の疑問である。

太一郎は使徒行伝の6章と7章に最も感激している。ステパノが「主イエス基督は確かに神の独り子、天下万民の救い主」であることを証明すると、証明を聞いたものがステパノに駆け寄り石をもって彼を惨殺する場面で、ステパノは「主よこの罪を彼らに負わせ給う勿れ」を祈って眠りについたことを知ったとき、太一郎は「到底迷信では出来ない。確かに活ける生命が働いているに違いない」(『実験談』 p.9) と思い、「若し基督教徒の信じている神が活ける神であるならば、活ける神ということをご存知ですか。クリスチャンの信じている救い主が活ける救い主であるという事を知らせて頂きたい」(同上)と祈った。これこそ太一郎が最初に跪いて祈った祈りであった。この祈りをするに「因らざるも主イエス基督の十字架の贖いに依って自分自身の罪は洗い清められ、許され、罪より解放されて、私自身が確かに永遠限りなき所の生命の約束に従っているとお示しを蒙り、同時に汝の名は天にある生命の書に記されたりというお示しを受けた」(同上、p.10)と太一郎は告白している。続けて、「私は唯活ける神を呼び求めたのでありましたが、この天地万物を創造し給う全知全能の神を唯拝するのではない、永遠に在します所のアバ父と呼ぶ所の父なる神である事を知らしめられた。これは実に不思議に感じた。活ける救い主を呼び求めた自分に対して、それ以上に父として、わが父として呼ぶことが出来るというご恩恵に与った。この時私は1人で部屋の中で飛び上がって喜んだ」(同上)という。「最早疑う余地がない。否それ所じゃない。父なる神、天に在す父として拝し得る所の御恩恵に与ったので、今は躊躇する所なく」(同上)「ハリス氏を通して洗礼を受け、主の御名に入れられた」(同上)のが26歳のときであった。

2. 新島の場合

ワイルド・ローヴァー号がボストン港に入ったのは1865(慶応元)年7月20日(『全集』⑩ p.474)であった。そして新島がハーディー家²⁴⁾に引

き取られたのが「10月14日」(同上)であった。その間彼はどうしていたのか。

ボストンに入るとテイラー船長は下船し、新島は「船の番をしていた荒くれた不信心な男たち」(『同志社談叢』第11号、p.83)の許に取り残されてきびしい重労働をした。上陸すると人々は、南北戦争後生活に苦しんでいた。「陸の上じゃお前なんかを救ってくれる人は1人もありゃしないよ。・・・もう1度海に戻る事だな」(同上)と言われた。船長が上陸する前にいくばくかの金を新島に与えていたので、ワシントン通りの書店で見つけた『ロビンソン・クルーソー』を買った。クルーソーから祈ることを学んだ新島は『どうか、私をみじめな境遇に打ち棄てないで下さい。どうか、私の大目的をとげさせてください』(『同上』p.84)と祈った。大目的とは、「脱国の理由」によると、学校教育を受けることと、知識を得ることであった。クリスチャンでワイルド・ローヴァー号の船主であるアルフィーアス・ハーディーは船長から新島のことを聞いていた。ハーディーは「この若い異国人の支援と教育の全責任を引き受けた」(同上)のである。このことを船長から聞いた新島は「私は喜びのあまり飛び上がりました。まことにかたじけなくて、私の両眼は涙にあふれました。私は思いました、神は私を見棄て給うことはないのだ」(同上)と喜びと感謝の気持ちを表している。

ハーディー夫妻に会った新島は自分の意思を英語で伝えることは出来なかった。そこで新島は会員ホームに送られ、「何故祖国を脱出することになったのか」(『全集』⑩、p.11)その理由を書くように求められた。その内容を紹介しながら新島の生い立ちをみてみよう。

新島が生まれたのは江戸にある安中藩邸²⁵⁾である。父は「藩の文書、記録の執筆、作成をする」(『同上』p.382) 祐筆で、祖父は「殿様の召使やご家人、小姓、使い走り、料理人、駕籠かき等々」(同上)の総元締であった。新島が5歳のとき習字の稽古、8歳で絵画、礼儀作法を学び、10歳で漢籍、剣術と馬術を習い始めた。13歳で蘭学を学び始めるも、先生の田島順輔が長崎留学のため14歳で中断する。15歳で藩主の送迎や記録の保管にあたるが、それは彼の希望にそわない仕事であった。16歳のとき、父が藩

主に随行して大阪に出張中、祐筆職代勤および書道教授をする。その頃、シャンハイのブリッジマン博士²⁶⁾が中国で書いた『合衆国の歴史』を読み、「驚嘆のあまり私の頭はとろけそうな気がした」(同上、p.12)と新島は回顧している。「大統領を選ぶこと、無月謝学校、公立救貧院、感化院、工場等をたてること。そこで私は、日本国の将軍はアメリカの大統領のようであればならないと考えたのです。・・・その時以来私はアメリカのことを知りたい」(同上)と新島は思う。友人から借りた中国語で書いた聖書を読んだとき、新島は「先ず神を理解した。・・・次いで私はイエス・キリストが聖霊の御子であること、彼は全世界の罪の故に十字架につけられたこと、それ故に私たちは彼を私たちの救い主と呼ばなくてはならないこと」(同上、p.15)を悟ったと言う。さらに「私を創ったのは誰か？私の両親か？そうではない、それは私の神だ。私の机を作ったのは誰か？大工か？そうではない、私の神だ。神が地上に木をはえさせたのだ。大工がこの机を作ったのではあるが、その机は実際木からできたものだ。そうであるなら私は神に感謝し、神を信じ、神に対して心の正しい人にならなくてはならない」(同上、pp.15～16)と思うようになり、この時以来英語の聖書を読みたくなり、函館に行って英語の教師を得たいと決意した。快風丸でいよいよ函館に行くことになったとき、祖父や両親がどんなに悲しむかと思うと、新島の決意は鈍ったが、「私の両親が私を生み、育ててはくれたが、私は本当は天の御父に属している。それ故私は天の御父を信じ、御父に感謝し、その道に従って走らなくてはならないのだ」(同上、p.17)ということで決意を固くした。ついに新島は函館よりベルリン号(W.T. セイヴォリー船長)で出帆し、シャンハイでワイルド・ローヴァー号(H. S. テイラー船長)に乗り換えボストンに入港することになる。以上は「脱国の理由」(『全集』⑩ pp.11～20)からの抜粋である。

新島の作文を読んだハーディー夫妻は彼の教育を引き受け、「1865年10月末」(同上、p.57)に、彼をマサチューセッツ州アンドーヴァーにつれていった。ハーディーはミス・ヒドン²⁷⁾に新島を引き受けてもらうよう頼んだが、彼女は躊躇した。ハーディーは新島の作文を残して去ったが、この脱国の理由はヒドンの心を捉え、彼女は新島を下宿させることにした。ヒ

ドン家には当時、アンドーヴァー神学校で勉強していたイーフレ임・フリント夫妻²⁸⁾が住んでいたが、夫妻は新島の家庭教師の役を果たしてくれている。ここで新島はフィリップス・アカデミー²⁹⁾に入学する。この高等学校は1778年の創立で、ハーディーの母校であり、彼は当時この学校の理事をしていた。ヒドンは「新島を自分が通う当地のオールド・サウス教会に連れて行き、教会学校で学ばせた。」(『新島襄と建学精神』p.34)

アンドーヴァーに着いた時、新島は日記帳に「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」[ヨハネ伝3・16](『全集』⑩、p.58)と書いた。

1866年12月25日、新島はハーディー夫人に次のように書いた。「神学校付属教会の聖餐式は次の日曜日に守られることになりました。私はその時に入会し、父と子と聖霊の御名において洗礼をうける」(同上、p.69)ことになったと知らせた。その時の覚悟を新島はハーディー夫人への手紙の中で、次のように書いている。「今や私はイエス・キリストが私たちの罪のために死に給うた神の御子であり、私たちはイエスを通して救われる、と信じています。私は何にもましてイエスを愛しています。私は自己の全部をイエスのために投げ捨て、イエスの御前で正しいことをしようとしています。これが私の誓いです。私は日本に帰り、人々を悪魔からイエスへと方向転換させるために頑張ります。・・・私は教会に入会してキリストと一体になりたいのです。」(『全集⑩』pp.68～69)そして12月30日に受洗したのである。その時23歳であった。

新島の回心についてはフリントがJ. H. シーリー教授³⁰⁾に宛てて書いた手紙の中に、新島は「アンドーヴァーに来る前に改心していたのだと思います」(同上、p.79)と述べている。

このことについて本井康博教授が検証している。確証の1例はボストン入港後に買った『ロビンソン・クルーソー』(『新島襄と建学精神』p.36)であるとす。本井教授は新島の日本脱出の理由の中に、「同書をいわば参考書として用いたに相違ない」(同上)と述べ、更に「英作文と原書には共通する文言や精神が見られるから」(同上)という。これに関しては論文

「新島襄の脱国の理由と『ロビンソン・クルーソー』」（『新島研究』98号）を参照されたい。この小説の内容は宗教的で新島は「クルーソーが祈ることを教えた」（『同志社談叢』11号、p.83）という。1865年10月14日のハーディーに宛てて、「私はあなたに感謝します。あなたは私を安心させて下さいました。私は感謝の気持ちを言葉では表せません。私はあなたのためにいつもこう祈っています。神よ、もしもあなたが目をお持ちなら、私に目をかけて下さい。耳をお持ちなら、私の祈りを聞いて下さい。聖書で私を礼儀正しいものとして下さい。主よ、ハーディーさんの上にあなたの御心がありますように。悲しい境遇から彼が解放されますように。主よ、どうか、ハーディーさんに目をかけて下さい。そして病気や誘惑から彼をお守りください」（『全集』⑥、p.4）と新島は祈りに満ちた手紙を書いている。

ここまでのところ、洗礼を受けるまで新島が回心に悩んだり、苦しんだりした形跡は全く見られない。

3. 2人の共通点と異なる点

共通点は仏教徒の家に生まれ育ったことである。まず、新島は祖母の死を仏式で送ったのを見ているし、太一郎は祖母の和賛を聞いて育っている。第2に、2人とも日本ではキリスト教が邪宗といわれていたことは知っていた。しかし渡米後と渡米前の違いはあっても、当時のアメリカを形成したキリスト教文明に関心を持っている。

2人の異なる点を見よう。太一郎はキリスト教を邪宗と教えられ渡米したが、太一郎に親切にしてくれたクリスチャン女性の生き方が手本になり、仏教によって心を鍛えようとしたが、いかんともしようがなかった。邪宗であると教えられていたキリスト教によって支えられたアメリカの文化などあり得ないというところから出発し、食わず嫌いであったキリスト教に関心をもち聖書を読み始めた。聖書を読み、納得したところで洗礼を受けている。

新島は渡米する前からキリスト教に関心をもっていた。簡単な翻訳ではあったが『ロビンソン・クルーソー』を読み広い世界を知る。ブリッジマ

ンの『合衆国の歴史』を読み、アメリカのことをもっと知りたいと思っているときに、聖書との出会いがあり、アメリカ文化の基礎となったキリスト教に関心を持った。新島の場合は、日本にいたとき、既にイエス・キリストは全世界の罪の故に十字架に磔られたこと、自分を作ったのが神である事を知っていた。

2人のキリスト教との出会いの背後には、生育歴が大きく影響している。両親と祖父母のもとで生まれ育った新島、6歳で父と死別し、再婚した母に見棄てられ、親戚をたらいまわしに預けられた太郎。新島が下級武士の家に生まれたのにたいし、商人の家に生まれた太郎。幼少より学問、礼儀作法の教育を受けた新島に対し、15歳まで自分の名前もろくに書けず、地元の塾で学び、13歳で行商に出た太郎。アンドーヴァーに来るまでに回心していたとプリントをして言わしめた新島。キリストが救い主であることは理解したものの、自分自身の救い主として跪けなかった太郎。

切羽詰まった2人であったが、どちらがより切羽詰まっていたらうか。新島である。彼が初めてボストン港に下船したとき自分がどう声を掛けられたか。船内で働く荒くれた不信心な船員の日常を見たとき新島はアメリカ社会で生きていけるか不安でいっぱいであったと思われる。それが新島の手記によくでていいる。「若し十分な知識を獲得できないのであれば、どうして日本に帰り、藩主や家族や友人に顔を合わすことが出来るでしょうか。それは全く恥ずかしいことでもあります。私は知識を得ることを望んで、大迷惑を掛けて国を出たのですから、このままですと彼らは私を犬や猫に等しい」(『全集』⑩、p.19)と見做されることを内心恐れ、「ハーディーさんは私をどんな学校にやって下さるのでしょうか、どうか教えてください。私の願うところは、ハーディーさんが食事の余りを私の食物として与えて下さること、古着一着を私に下さること、私の勉強のためにインキとペンと紙を下さること」(同上)であると手記に記している。

その点、太郎はアメリカの現実社会で既に2年生きていた。アメリカに到着して1年で商売に失敗していたが、相撲取りにでもなれるような頑丈な体(身長180cm、体重70キロ)をしていた太郎はアメリカで生きて

いける自信はあったろう。太一郎にとってのキリスト教は自分の性格を良くするためのものであり、新島にとってのキリスト教はキリスト教の勉強を通して、自分を含めすべてのものは神によって作られたこと、キリストがわたしたちの救い主であること、キリストは聖霊の御子であることを知った上で、天の御父を信じ、御父に感謝し、その道に従って走ることであった。知識としてのキリスト教に関心を持って渡米した新島にとって、この時キリスト教は彼の体の一部になったのではないか。

IV. 洗礼を受けた後の2人

1. 太一郎の場合

渡米後2年、1890（明治23）年、26歳の太一郎はキリスト教伝道のため一時帰国した。先ず親類縁者から始めるために伊万里に帰り伝道を始めた。山崎に太一郎がクリスチャンになったことを知らせ、入信を勧めると、山崎は腹を立て、太一郎は山崎家から除籍された。これが森永家再興のきっかけとなった。おばは太一郎が「耶穌になったというので、3日3晩泣き通して嘆き」、山崎は、「一生涯勘当する、国賊同然のものとなったからには日本に帰ることがあってはならぬ」（『新報』、昭和10年3月10日）と激しい手紙を書いてきた。親類の反応は冷ややかであった。「何れの家でも敬遠されて閩を跨ぐことさえ容易でなかった」（『新報』昭和10年4月10日）という。

この部分を読むと、新島がミス・チャンドラーに「神様に祈ってみませんか？」（『全集』⑩、p.66）と言った場面を思い出す。彼女は「主よ、わたしをあわれんで下さい。イエス・キリストを通してあなたのみ恵を示して下さい」（同上）と二度叫んだのだった。この2つの例は異文化の中で育ったものと、キリスト教文化の中で育ったものの違いでもあったろう。

太一郎は3か月後に再び渡米した。伝道事業の難しさを知った太一郎は「慎重に持久の策」（『新報』昭和10年4月10日）を講じ、「無学の者は何か手に職を修得せねばならない」（同上）ということ、そして日本でキリスト教の伝道をするにあたり、「英米の伝道会社より伝道資金を仰ぐことは国

辱であるから1銭たりとも外国の補助を受けない決心」(同上)をした。これはパウロが「手づから業をなしつつ」(同上)アジアからギリシャを経てイタリアにまで伝道したことに感動したことが基礎になっている。

太一郎が外国より資金を仰ぐことなく伝道するには自分で資金を稼がなくてはいけない。何をしたらいいのか。「何か身につく職を覚えるのが一番よい」(『パイオニア』p.24)そこで「私の性質としては、日々の消費物を製造するものがよい、それには、未だ日本にもやりだした者はないと思う洋菓子の製造業が適当だ」(『パイオニア』p.24)と彼は思い、その道が開けるように祈ったという。新島がハーディーに会うまでの気持ちと同じではなかったか。太一郎の目指した菓子製造は日本にないものという思いからであった。再渡米後、1899(明治32)年に帰国するまで、Bread bakery, Cake bakery, Candy factoryと職場を変えながらケーキ作りの修行に励んだ。まず、アラメダのジョンソン経営のホームベーカリーに皿洗いとして雇われた。「給料が安くても菓子屋の屋根の中に先ず住み込みさえすれば年来の希望が達せられないことはあるまい・・・勤め振りによって必ずや菓子製造を直接手伝うようになる」(『新報』昭和10年7月10日)と信じてホームベーカリーに住み込んだ。ところが1か月後にはこのレストランが閉鎖された。仕事がなくなると思いきや、ミセス・ジョンソンは、「何故かお前を解雇したくない、是非ここに置きたいから用がなくとも暫く遊んでおれ、何か用を命ずる」(同上)との事であったので、太一郎はベーカリーの雑用係りをしながら1か月ばかりを送った。このベーカリーの頭職人はパン作りにおいて相当の技術の持ち主で評判の職人であったが、酒飲みで泥酔して、黒こげのパンを焼くことがあり、売り物にならないことが続き解雇された。聖書にも「酒を嗜まず」とあると太一郎は引用する。次に雇われたパンの頭職人はネルソンというキリスト教の信者であった。太一郎は彼の下で働くのだが、「午後3時または4時ごろより徹夜して翌日の午前8時、9時頃まで働き通しに務めねばならなかった。」「正味15、6時間は働いたろうが、その中には工場や店舗の掃除、店頭の営業」(同上)までも担当させられた。しかし「業を覚えるのに熱中していたので少しも苦にならなかった」(同上)という。

当時アメリカでは迷信的なことが流行していてフォーチュンテラーの看板があちこちででていた。ジョンソン夫妻もこの迷信にかかり営業がおろそかになった。太一郎は心配し聖書を読んで、迷信を捨てるように苦言を呈したが入れられなかった。その結果、このホームベーカリーは破産し、店は人手に渡ってしまった。「なんじの呪術に惑わされ・・・而して火と硫黄との燃ゆる池にてその報いを受くべし」と太一郎は聖書の黙示録を引用する。

これを引き継いだのがヤングという人であったが、彼は太一郎に「奴隷であるかの如く命令」（『新報』昭和10年8月10日）していた。折あらば辞職しようと考えているときに、ネルソンが独立するので「共に働いてくれ」（同上）と相談を持ちかけてきた。ネルソンの店は人気をかくし繁盛した。しかしネルソンは慢心し「1年後には旦那気取り」（同上）になったので、太一郎はネルソンを見限った。

図らずも1895年、「オークランドのブルーニング氏³¹⁾経営のキャンデーストアで朝夕掃除をする日本人1名入用」（同上）と知り、面接の結果キャンデー工場に働くことになった。太一郎はブルーニングから「ジョウ」と呼ばれることになる。午前5時にはストアに行き、掃除をして工場に行くのが日課であった。ここでは数十名が働いていたが、血気盛んなものも居て、「このジャップに何ひとつ用事を割り当ててはならぬ」（同上）と工場長が一同に言い含めた。それを気にしてもどうにもならないので、「見ざる、聞かざる、言わざる」主義で働いた。新島には差別の経験があったのだろうか。

太一郎がアイスクリームやソーダ水の係りを命じられたとき、その係りであったスペイン人が解雇され、太一郎は団結して排斥されるような目にあっている。「艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ」（同上）と自分を励ました太一郎であった。

新島にこのような差別を受けた経験があったのだろうか。

ベルリン号上での出来事として、新島が船客に殴られたことがあった。殴った船客が「アメリカ人であったかイギリス人であったかは知らない」（『全集』⑩、p.45）という。しかしアメリカ人かイギリス人と書いている

ところが問題である。先進国の人間と思われる。新島は自室に駆け込み、日本刀を手にして飛び出そうとするが、「これは取るにたらぬ事柄ではないか。恐らく私はこの先もつきびしい試練に会うことだろう」（同上、p.46）と自分の辛抱のなさを恥じ、その後は刀に手を掛けまいと決意している。これがきっかけになったかどうかは不明であるが、ハーディーに迷惑や心配を掛けないように努めたのかもしれない。これまでのところ新島が他に差別を受けた形跡はない。

太郎はブルーニング工場で働くようになり感謝と喜びに満たされた。毎朝5時前に起きて、朝食を取り、キャンデーストア掃除をし、それから工場に行って終日働き、工場の仕事が終わるとキャンデーストアに戻って後始末をするという1日を過ごしていた。そのような生活をしているとき、発熱し、身動きが取れなくなった。メソジスト日本人教会の2階に1室を借りていたので、中村徳太郎牧師の見舞いを受けた。中村牧師は肋膜炎になっていた太郎に医者のお世話をし、大小便の始末までしてくれていたのである。話はそれるが、彼が帰朝後中村牧師を訪ねたときには既に亡くなっていた。太郎が帰朝後すぐに中村牧師を訪問しなかったのは「信仰の道を離れて墮落したので基督信者に逢うことが煙たい」ので「なるべく会うことを避けて居った」（『新報』昭和10年9月10日）と告白している。この時の自分を太郎は「我こそは罪人の首なるかな」（『新報』昭和10年9月10日）と振り返る。彼の信仰が復活するのは「昭和5年の末二度目の妻の死に逢いし」（同上）時であった。

話を肋膜炎手術に戻す。太郎は手術後再びブルーニング工場に戻り仕事をすることになるが、「ジャップが戻ってきた」というので再び嫌がらせを受けることになる。しかし5年間辛抱の結果務めを果たし帰国した。35歳の1899（明治32）年のことであった。合計11年間のアメリカ滞在であった。

2. 新島の場合

1866（慶応2）年24歳で洗礼を受けたあと新島はどうか。1867年25歳でアーモスト大学³²⁾に入学し、寮生活をする。「3年間の在学中に3人

のルームメイトがあった」(『新島襄とアーモスト大学』 p.223) ことは分かっている。そのうち特にホランド³³⁾との交友関係はホランドが「毎週1度、必ず両親にあてて書いた手紙がほぼ完全に残っている」(同上、p.224)からだ。「彼[新島]は徹底したクリスチャン、そして完全な紳士です。・・・1日中、静かなることハツカネズミのごとくであり、・・・毎晩2人でお祈りしています。[聖書を]1章ずつ読み」(同上、p.230) 必要な場合にはホランドが解説をしたこともあったとホランドは書いた。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(同上、p.233) という聖句に出会い、アメリカに来る決意をしたと新島はホランドに語ったようだ。新島は「ホランドに日本語を教え、その代わりに同氏からギリシア語の手ほどきを受けた。」(『全集』⑩ p.81)「新島が・・・はじめてアーモストに到着した時、駅に出迎えたのがシーリー教授だった。」(『新島襄とアーモスト大学』 p.191) 新島がアーモスト大学から「精神的・人格的な影響を受けたとすれば、それはおもにシーリーをとおして」(同上、p.189)であった。シーリーの職名は「精神ならびに道德哲学教授」(同上、p.190)であった。しかし新島が彼の授業を受けた形跡は残っていない。シーリー家の人びとは新島を家族の1員のように待遇した。新島はシーリー夫人を「私のアメリカの母の1人」(同上、p.192)と呼んでいる。「奥様と先生から受けたご恩に対し、感謝申し上げます」(同上、p.193)と新島はシーリー夫人宛の手紙に綴っている。1870年にBachelor of Science (B. S.) の称号を得てアーモスト大学を卒業。アンドーバー神学校³⁴⁾に入学した。1872年には田中不二麿理事官³⁵⁾とヨーロッパへ教育視察に向かう。ヨーロッパ訪問中、田中は新島に「一緒に帰国するよう要望」(『全集』 p.170)したが、「田中氏とともに帰国しないことに決断」(同上、p.173)し、アンドーバー神学校への復学を決意する。1873年に文部理事官随行を辞し、ヴィスバーデン³⁶⁾で静養した。1874年、アメリカン・ボード日本ミッションの準会員に任職され、マウント・バーノン教会で接手札を受けた。アンドーバー神学校を卒業し、ラットランドで演説をする。これはアメリカン・ボード³⁷⁾の第65回年次大会がヴァーモント州ラットランド³⁸⁾で開かれたときのこと

である。この大会では、海外の任地に赴く宣教師たちが別れの言葉を述べる場でもあった。しかし新島の「短い演説の主題は日本にキリスト教の大学を設立することについてのまじめなアピール」（同上、p.186）であった。この計画について新島はクラーク総主事³⁹⁾とハーディーに相談したが「あまり激励は与えられなかった。」（同上、p.186）「教育そのものがボードの第1義的な目的ではなかった」（同上）からである。集まりの前日に新島はハーディーを訪ね、この問題を相談した。「余り成功しないだろう」（同上、p.189）というのがハーディーの意見であった。しかし新島は「自分の意見を通してみたい」（同上）と主張すると、ハーディーは、「どうもおぼつかないと思うのだが、まあやってみるか」（同上）との同意を得た。そして「5千ドルの寄附の約束」（同上、p.190）を取り付けたのであった。新島は1874年11月29日、安中の自宅に帰った。

結語

2人がクリスチャンになった過程と差別に会ったかどうかを見てきた。キリスト教を背後に持つアメリカ文明を自国に居るうちに知った新島のキリスト教への思いと、アメリカ滞在中に、世話になった下宿のクリスチャン夫人の親切から自分の欠点ある性格を直そうとする太郎の姿勢とは出発から違っていたが、2人とも納得してクリスチャンになっている。差別については、学校と実社会との大きな違いがある。ボストンで停泊中に、新島が船の中の荒くれ者と仕事をしていたり、下船したときに投げつけられた言葉などから判断すると、このような社会では差別を受けたろう。しかし学校は超一流で、そこに集まる生徒や学生の質と新島の人柄が差別を吹き飛ばしたのであろう。新島がベルリン号で殴られるという屈辱を受けたとき、この程度のことを忍ぶことが出来なくてこれからの困難を乗り切れるかと自問したとき、自分が受ける屈辱を封印しよう、愚痴は言うまいと決意したのではないかと筆者は思うこともある。太郎は11年のアメリカ生活の内、ブルーニング工場で働いた5年間はひどい差別を受けた。肋膜炎が治って再び職に就いたときにも嫌がらせをうけている。しかし太一

郎はどの経営者にも気に入られた。彼の熱意が通じたというべきである。「艱難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生みだす」(「ローマ人への手紙第5章3節～5節」)を地で行ったというべきであり、「凡て疲れたる者、重きを負える者は我に来たれ。我、汝等を休ません」(「マタイによる福音書11章28節」)の言葉に安んじた太郎であった。

注

- 1) 新島襄 1843(天保14)年2月12日(新暦)江戸の安中藩邸内の武家長屋で生まれた。幼名は七五三^{しめ}太。『ロビンソン・クルーソー物語』やアメリカン・ボードの宣教師であるE.C.ブリッジマンの『連邦志略』を読み、海外志向を高める。1864年7月、ベルリン号(セイボリー船長)に乗り込み、シャンハイまで行き、ワイルド・ローバー号(テイラー船長)に乗り換えアメリカのボストンへ。ハーディー夫妻に引き取られ、学問に打ち込む。1874年10月、アメリカン・ボードの準宣教師として帰国。翌年の1875年11月29日に同志社英学校を創立。1890年1月23日大磯で永眠。(本井康博著『新島襄と建学精神』2008年)
- 2) 森永太郎 1865(慶応元)年、佐賀県伊万里市(現在)に生まれた。父・常次郎、母・きく。明治3年、6歳で父と死別。父の代になって事業が振るわず、家屋敷をはじめ、動産不動産とも他人の手に渡る。母は太郎を連れて実家の力武家にもどった。翌年母の再婚により生別。親戚間を転々とする。8歳で山崎文左衛門の養子となり、山崎太郎として入籍。1890年、山崎家の戸籍から森永家に移り、森永太郎となる。11年の滞米生活を経て1899年6月に帰国。同年8月東京赤坂に2坪の菓子製造所「森永西洋菓子製造所」を創業。1905年エンジェルマークを登録。1935年71歳で社長を引退、伝道に尽くす。1937年1月24日永眠、73歳。(森永太郎翁顕彰会『伊万里が生んだ偉人 森永太郎翁』昭和62年)
- 3) 山崎文左衛門(1831～1901) 現在の武雄市西川登町小田志に生まれる。幼いとき、父に伴われて伊万里に移り、陶器商を営んだ。文左衛門は、伊万里の地域開発を志し、土木工事、鉄道敷設、停車場設置などに多額の私財を投じた。特に新田地区の埋め立て工事を進め、現在の浜町(駅通り)周辺の開発に力を注いだ。この功績にちなんで町民はその街区を「山崎町」と名付けたほどである。(『伊万里市史』)妻は太郎の父・常次郎の妹・イシ。イシが山崎と結婚入籍した際、山崎は太郎

がまだ戸籍に届けられていないことに気づき、太郎の名で山崎の実子として籍に入れたのが明治5年、8歳のときである。森永の籍に帰って森永太郎となるのは明治23年、太郎が26歳のときであった。（『いまりが生んだ偉人 森永太郎伝』、『菓子新報青年版』昭和10年3月10日）

- 4) 太郎の母方の祖母 鍋島本藩家老職であった納富家の長女・チカ。当時の婦人としては教育あり特に篤信家。太郎の大恩人で、彼女の鴻恩を受けたことは何物にも比する事が出来ない。彼に幾分の取柄が何か1つでも有るならば、それは祖母の賜物。彼女は常に他人のものに塵1つたりとも手を付けてはならぬ、正直でなくてはならぬ、正しく世に立つべきこと等等教訓を以って寝物語にも聖人君子の教えや模範とすべき善行をなした人々の昔話をし、親無き太郎には最も善き指導者となって心を労した人物。彼は祖母・チカを思い起こす毎に感涙に咽ぶと言う。（『菓子新報青年版』昭和8年5月10日）
- 5) 道谷商店 道谷商店 1885（明治18）年、横浜本町通りにあった九谷焼の売り込み商。太郎はここで外国商館売り込みに従事。（『森永五十五年史』）
- 6) 綿平商店 九谷焼第1の荷主。横浜本町通りの綿平横浜支店。太郎は主任として勤務。（『パイオニアの歩み』現代語版）
- 7) ロビンソン・クルーソー物語 徳川末期にはダニエル・デフォアの『ロビンソン・クルーソー』の邦訳（オランダ語を通しての重訳）が2種類あったことが知られている。新島が読んだのは嘉永初年頃に江州膳所藩の蘭学者・黒田麴樞の訳した『漂荒記事』であった。（『新島襄全集⑩』）
- 8) 快風丸 新島が最初に仕えた藩主は、上州安中藩の板倉勝明。安中藩の宗家に当たるのが備中松山藩（今は岡山県高梁市）。当時の藩主は板倉勝静という幕府の筆頭老中。この勝静がアメリカから8千両で購入した帆船。この試運転航海に誘われ、七五三太は江戸と玉島（今は倉敷市）間を往復している。（本井康博著『錨をあげて』）
- 9) ベルリン号 the Berlin 長崎のトーマス・ウォルシュ商会所有の2本マストの船で、207トン。ニューヨークで1855年に建造。新島襄を函館から上海まで運んだ。当時の船長はW.T. セイヴォリー。その後、1865年に福井藩が購入して、松平春猷によって富有丸と命名された。1868年、戊辰戦争で沈没。（『現代語で読む新島襄』p.300）

- 10) セイヴォリー船長 W.T. Savory (1827-1897) アメリカのマサチューセッツ州セーラム出身の船長。ベルリン号で新島襄を函館から上海まで運んだ。新島は船長の信仰を疑問視するが、セイヴォリー自身はセーラムの第1教会(会衆派ユニテリアン)の会員である。晩年はセーラムで実業に従事したが、健康をそこねたためフロリダに転出し、デランドで死去。(『現代語で読む新島襄』p.285) セイヴォリー船長は、日本人の海外渡航が違法であることを知りながら、新島の夢をかなえるために義侠的に乗船を認めてくれた。しかし、上海から長崎に戻った際、密出国帮助の件が露見して問題となった。結局その責任を問われた彼は船会社から船長職を解かれ、・・・長崎からイギリス経由でアメリカに帰国せざるをえなかった。(『新島襄と建学精神』p.19)
- 11) ワイルド・ローヴァー号 the Wild Rover ハーディー商会所有の帆船(貨物船)。1853年、メイン州のダマリスコックで建造される。重さ1100トン、長さ187フィート、幅36フィート、深さ22フィートの3本マストの快速船。新島襄が上海からボストンまで乗船した後、船主が代わり、1871年、座礁のためロングアイランドで沈没した。(『現代語で読む新島襄』p.280)
- 12) テイラー船長 H.S. Taylor ワイルド・ローヴァー号の船長で、新島襄を上海からボストンに運んだ。新島(Joe)の名付け親。帰米中は、新島をチャタムの生家に招き、家族同様に扱った。新島の留学中にボストン港で事故死。それを知った新島は彼の親戚に入信を勧める熱烈な手紙を書き送った。(『現代語で読む新島襄』p.282)
- 13) 原六郎(1842~1933) 鳥取藩士。銀行家。明治維新後、渡英して銀行論を学ぶ。1871年にボストンで新島襄に会う。帰国後に第百国立銀行を創設。同志社の後援者となり、新島の大学設立運動にも協力的であった。北垣国道の媒酌、新島の司式により、土倉庄三郎の長女(同志社女学校で学んだ富子)と結婚。晩年、洗礼を受けてクリスチャンとなる。(『現代語で読む新島襄』p.297)、1883年、横浜正金銀行頭取。(『コンサイス日本人名事典』第4版)
- 14) オークランド Oakland アメリカ西部、カリフォルニア州西部の都市。サンフランシスコ湾に臨む。(『コンサイス外国地名辞典』)
- 15) 祖父・太兵衛 伊万里焼の間屋と魚問屋を営み、魚問屋のほうは、主に壱岐の魚を中継ぎしたから「壱州屋」と称した。伊万里湾の魚業権を・・・湾の入り口に近い

西山代漁村（現在の伊万里市山代町）に貸しつけていた。（『いまりが生んだ偉人 森永太郎伝』）

- 16) 犬塚伊左衛門 「多分天保時代、江戸の蠣殻町に支店を設けて盛大に伊万里焼の営業」、屋号を丸駒という。鍋島家の御用商人として成功。（『菓子新報青年版』昭和10年3月10日）
- 17) 川久保雄平 明治6年、伊万里戸長大木清七郎たちが創立した伊万里小学校啓蒙社の教師。書店を開き、傍ら文房具なども商っていた。太郎は昼は店番をして、夜漢学を教授してもらうということで入塾した。月謝の米2斗は、伯母たちが夫やしゅうとめ達の目を盗んで、少しずつへそくって溜めたものを仕送りするので、順調には届かなかった。予章の妻にいやみを言われ、それが辛くて、太郎は夜逃げ同然に、伯母の家に逃げ帰ったこともあった。やがて彼は呼び戻され、月謝の米は納めなくてもよいという、予章のはからいで、13歳の春まで店員を務めながら、ちょうど1年、習字や学問を教えてもらった。太郎は成功してから、赤坂田町の家に川久保先生を迎えて世話している。先生の死後、伊万里の有志に呼びかけて、頌徳碑をたて、ご恩に報いている。（『いまりが生んだ偉人 森永太郎伝』）
- 18) 堀七商店 店主は武富七太郎。武富家は代々陶器商であった。武富家のそばには小川があり、昔は堀端と呼ばれていた。武富家の屋号「堀七」はその堀端と名前の七太郎と取り合わせたもの。「堀七」の最盛期は文政～天保年間とされ、七太郎の時代と重なる。江戸、大阪をはじめ伊予、筑前、紀伊、長門、越後、土佐、出雲などへ伊万里焼を運び、売りさばいた記録が残されている。（『伊万里史』）
- 19) 大阪出張 美濃多治見の豪商西浦の支店。山崎伯父は明治以前から伊万里焼を大阪西浦支店に送っていた。1882（明治15）年18歳のとき、大阪出張し、西浦支店の帳簿と残品の引き合わせを命じられた。（『森永五十五年史』）
- 20) 東京出張 東京日本橋堀留の西浦支店。明治初年から伊万里焼を送る。1883（明治16）年19歳のとき、東京西浦支店に出張し、帳簿の引き合わせ及び倉庫の現品調べを行う。（同上）
- 21) 横浜の有田屋 1884年20歳のき、東京出張の機に横浜に留まり、伯父の山崎も出資していた合資会社・有田屋に従事し、横浜居留地外国商館への売り込み及び東京の卸売りに務めた。（同上）
- 22) ハリス牧師 Merriman Colbert Harris 1846. 7. 9～1921. 5. 8 アメリカのメソジス

ト監督教会宣教師。オハイオ州ビールズビル (Beallsville) に生まれる。アリゲニ (Allegheny) 大学を卒業後、1873年12月に来日し、翌年1月20日函館に赴任。妻と共に北海道におけるプロテスタント最初の伝道者となった。函館教会を創立し、W.S. クラークの感化を受けて入信した札幌農学校の学生たちに札幌で授洗している。1886-1903年帰国し太平洋岸及びハワイの日本人に宣教。1904日本朝鮮宣教監督として再び来日し、1907年のメソジスト3派の合同には本多庸一と共に貢献、名誉監督として終生日本宣教に尽くした。東京の青山学院内のハリス館で死去。内村鑑三に授洗。(『キリスト教人名事典』 日本基督教団出版局)

- 23) 美山貫一牧師 1847 (弘化4) ~1936 (昭和11) 7. 29 メソジスト教会牧師。萩藩士。内藤氏の次男に生まれ、はじめ内藤匡二郎と称した。1853年同藩の藤田新八の塾に、1863年山口兵学校、1867年三田尻兵学校に学び、吉田松陰の影響を受ける。1870年美山家を相続、美山貫一と称する。1871年海軍兵学寮を受験して不合格、東京に行き陸軍省に勤める。1875年志を立ててアメリカに渡る。サンフランシスコに滞在中、宣教師M.C. ハリスらの感化により入信受洗。メソジスト教会員となり、伝道者となる。1884年帰国、銀座教会を設立。翌年再びアメリカに渡り、サンフランシスコ美以教会牧師。1886年ホノルル伝道、同地総領事であった安藤太郎をキリスト教に導き、共に禁酒運動を開始する。1890年帰国。名古屋美以教会牧師に就任、1893年再び銀座教会牧師。1903年鎌倉メソジスト教会牧師となり、引退して同地で死去。(『キリスト教人名事典』 日本キリスト教団出版局)
- 24) ハーディー Alpheus Hardy (1815-87) 脱国してアメリカにやってきた新島襄を助けてフィリップス高等学校、アーモスト大学、アンドーヴァー神学校へと送り、その間の学費と生活費を援助しただけでなく、帰国して同志社英学校を設立した新島に対し、その後も金銭的な援助を続けた新島の大恩人であり、新島はその恩に深く感じて自分のミドル・ネームをハーディーと称した。ハーディーはボストンの実業家で、十数隻の船を所有してヨーロッパや東洋との貿易にも従事した。典型的なニュー・イングランド・ピューリタンの実業家であり、少年の頃牧師として立つ志を抱いてフィリップス高校に入学しながら病気のために挫折したけれども、クリスチャン実業家として神に仕える決意を貫いた。フィリップス高校、アーモスト大学、アンドーヴァー神学校の理事をつとめただけでなく、アメリカン・ボードの法人会員として、また運営委員として1857年から86年まで熱心にそのつとめをはたし

- た。73年から86年まではその運営委員長としての重責をはたした。ハーディーがアメリカン・ボードを通して、特に新島を通して日本の宣教と教育のためにつくした貢献は、はかりしれないものがある。またハーディー夫人Susan Holmes Hardy (1817-1904)は新島にとって「アメリカの母」であった。(『新島襄全集⑩』 p.380)
- 25) 江戸の安中藩邸 現在、その場所(神田一ツ橋の学士会館前)には生誕記念碑がある。新島はここで成人するまで生活する。(『新島襄と建学精神―「同志社科目」テキスト』 p.1)
- 26) ブリッジマン E.C. Bridgman (1801-1861) アメリカン・ボードから上海に派遣された宣教師。中国名は碑治文。アーモスト大学、アンドーヴァー神学校卒(いずれも新島襄の先輩に当たる)。聖書の漢訳を始め、新島襄に大きな影響を与えた『連邦志略』などの著書を漢文で著した。(『新島襄と建学精神―「同志社科目」テキスト』 p.10)
- 27) ミス・ヒドン M.E. Hidden (1818-1896) マサチューセッツ州アンドーヴァー在住の独身女性で、フィリップス・アカデミーに入学した新島襄をホームステイさせた。彼女の父は建築家で、アンドーヴァー神学校の校舎建築のためにアンドーヴァーに1816年に移り住んだ。その後、彼は同地出身の女性と結婚し、同地に住み着いた。M. E. ヒドンは彼ら夫妻の長女で、アボット・アカデミー(女子校)を卒業。新島が住んだヒドン邸は1811年の建造で、今もフィリップス・アカデミー近くのヒドン通りに建っている。(『現代語で読む新島襄』 p.297-296)
- 28) イーフレイム・フリント E. Flint Jr. (1828-1882) フィリップス・アカデミー、ウィリアムズ大学を卒業後、一時、学校教師、校長を務めたが、牧師になる召命を感じて、1865年に37歳でアンドーヴァー神学校に入学。在学中、M.E. ヒドン邸で同居した新島襄の家庭教師を妻(オリラ)と共に引き受けた。1867年に卒業後、ヒンズデールの教会に牧師として赴任。休暇中の新島をしばしば招いて、山登り、木の実の採集、魚釣り、スケッチなどを楽しませた。出身地のリンカーン(マサチューセッツ州)にある墓には「善き働き」(“WELL DONE”)と刻まれている。(『現代語で読む新島襄』 p.298)
- 29) フィリップス・アカデミー 1778年にマサチューセッツ州アンドーヴァーにS. フィリップス・ジュニアが創設した全寮制の中等教育機関。通称はアンドーヴァー。アメリカ有数の名門校で、G. ブッシュ元大統領の母校。新島襄が入学し

た当時は、古典学科と英語学科を有する男子校で、ピューリタン色がきわめて濃厚であった。教育目標は「人生の偉大な目的と真の営み」を生徒に自覚させ、「真の敬虔と徳の増大」とを図ることにある。新島在籍当時の校長S.H. テイラーはとりわけ厳格なピューリタンで、宗教教育の徹底を図った。新島の卒業後、隣接する女子校（アボット・アカデミー）と合併して、現在は共学校。（『現代語で読む新島襄』 p.111）

- 30) シーリー教授 J.H. Seelye (1824-1895) アーモスト大学、オーバン神学校卒。アーモスト大学教授（道徳哲学）、のちに学長。新島の恩師。新島が初めてアーモストにやってきた時に車で出迎え、入寮までの3週間、家庭に引き取った。以来、彼の家庭は一貫して新島のホスト・ファミリーであった。シーリーが出張などで不在のおりには食卓で新島が代わってシーリーの席に座り、食前の祈りをリードした。シーリーの講演集が日本で『宗教要論 全』として発行された際、新島はシーリーの人となり絶賛する序文を寄せた。一方、シーリーは学長のおりアーモスト大学から新島に名誉学位を贈った。（『現代語で読む新島襄』 pp.285-284）新島には夫人のエリザベスは「アメリカの母」の1人である。内村鑑三がシーリーから大きな感化を受けたことはよく知られている。（同上、p.113）
- 31) ブルーニング オークランドにあるキャンデー工場の所有者。ブルーニング氏はドイツ生まれで、幼少の頃両親や兄弟と友にアメリカに移住して来た。ミセス・ブルーニングはスイス生まれであるが、両親姉妹とともに一家でアメリカに移住した人である。ミセスはアメリカの大学で教育を受けた賢い婦人で、帳簿係をはじめ、凡ての事務をきりまわしていた。夫婦とも営業には全く真剣で、太一郎を感激させた。主人はとても大胆に、かつ細かい注意を払って、事業の発展に力を入れていた。（『パイオニアの歩み 現代語版』 pp.47-48）太一郎は11年のアメリカ生活の内5年間をひどい差別にあいながらもこの工場で過ごす。キャンデー製法の基礎を修得。この間肋膜炎を患い、中村徳太郎牧師の世話になる。ブルーニングは太一郎より東京が大都市であること、日本は日本人の実業家のみで、日本人の実勢力であることなどを教えられ、よく認識納得したうえで、商売上の訓話をした。すなわち、はじめより卸専門にせよ。家賃の安い辺鄙な場所でよい。最初は極小規模で創めよ。これは精神的な貴い贈り物となった。（『菓子新報青年版』昭和10年8月10日、9月10日、10月10日、12月10日）

- 32) アーモスト大学 1821年創設のアメリカ屈指の私立の名門大学。所在はマサチューセッツ州西部のアーモスト。会衆派教会の信徒の子弟のためのリベラル・アーツ・カレッジとして創設され、ピューリタン色が濃厚で、最初の50年間の卒業生のうち、約40%が宣教師を始め伝道者となった。・・・新島はここで3年間学び、「理学士」として卒業したが、国の内外を問わず学士号を授与された最初の日本人であろう。（『現代語で読む新島襄』 p.114）
- 33) ホランド 新島は3年間のアーモスト大学時代を寄宿舎で過ごした。その3年間に3人のルームメイトがあった。3人のうちホランドはずば抜けて重要な存在であった。毎週1度、必ず両親に宛てて書いた手紙がほぼ完全に残っているからである。共通の友人だったスマート（John Gardiner Smart）は新島の人となり、清潔好き、英語の助けを必要としていたこと、そして、何よりもクリスチャンのルーム・メイトをほしがっていたこと等を証している。ホランドは両親に向かって、新しいルームメイトを次のように紹介している。新しい室友のことでとても喜んでいきます。彼は徹底したクリスチャン、そして完全な紳士です。彼は顔色の白い連中、なすべき事を知るための手段をより多く持ち合わせている連中よりも、うんと多く、人生の恩恵や特典について知っています。1日中、静かなことハツカネズミの如くであり、僕は妨害を受ける心配はまったくありません。毎晩2人でお祈りをしています。[聖書を]1章ずつ読み、彼が希望すれば僕にできる範囲で解説を加えることがあります。（『新島襄の世界』 pp.113～118）
- 34) アンダーバー神学校 Andover Theological Seminary 1807年創立。会衆派教会系の神学校としてはアメリカ最古で、いわゆる「ニューイングランド神学」の砦。新島襄はこの神学校が生んだ176人目の宣教師であった。1886年、「アンドーヴァー論争」の舞台となる。新島の時代はアンドーヴァーのフィリップス・アカデミーの校地にあったが、現在はボストン郊外のニュートンに移転して他派の神学校と合同し、アンドーヴァー・ニュートン神学校と改称。（『現代語で読む新島襄』 p.301）
- 35) 田中不二磨理事官 1871年、日本が不平等条約の改正交渉と近代国家の視察、調査のために米欧に派遣した、岩倉具視を正使とする使節団。新島襄は留学生として協力を求められ、田中不二磨（文部理事官）の秘書・通訳（身分は3等書記官心得）として米欧とともに視察した。その「お手当」は1年間で2千百ドルを超える高給で、新島はその中から2百ドルを日本の親へ仕送りした。田中は帰国前、そして帰

国後も文部省の高官として新島を熱心に同省に誘ったが、新島の固辞にあったので「君は耶蘇の奴隷じゃ」と言ってついに断念した、という。（『現代語で読む新島襄』p.116）

- 36) ヴイスバーデン（Wiesbaden）西ドイツ中部、ヘッセン州の州都。ローマ時代より知られた温泉地で、27か所から摂氏66度の温泉が湧き、リュウマチや呼吸器疾患に効く。
- 37) アメリカン・ボード 1810年に創立されたアメリカ合州国最古のミッション・ボード（宣教師派遣団体）。当初は超教派であったが、次第に会衆派教会色を強めた。最初の宣教師たちはセーラム（マサチューセッツ州）から1812年にインドに派遣されたが、日本への進出は他教派より遅れた。そのため、D.C. グリーン夫妻が1869年に来日したときには、京浜地方を避けて、宣教師の手薄な関西を活動領域に選ぶにいたった。このミッションの「準宣教師」である新島襄が同志社を関西（京都）に設立した背景には、こうしたミッションの来日事情と、同志社を京都に「誘致」した京都府顧問の山本覚馬の存在が大きい。（『現代語で読む新島襄』p.188）
- 38) ラットランド 1874年秋にアメリカン・ボード第65回年会がヴァーモント州ラットランドで開催された。会場は現存するグレース教会。新島はアメリカン・ボードから宣教師（ただし外国人であるために議決権のない「準宣教師」）に任命され、日本に派遣されることになっていた。この年会の最終日、新島は出発の挨拶の機会を捉えて、「日本にキリスト教主義の学校を創りたい」と、かねての壮志を熱涙をこめて壇上で語り、献金を訴えた。千ドルを最高として何口かの献金（予約）がその場でなされた。その中にはそれぞれ2ドル（もっとも小口の寄付）を差し出したみずばらしい身なりの農夫と老いた女性とがいた。彼らはこの日、新島をもっとも感激させた寄付者であった。寄付金の総額は5千ドルとなった。これが翌年、同志社開校の「核」となった。（『現代語で読む新島襄』p.116）
- 39) クラーク総主事 Re. Nathaniel George Clark, D.D., LLD. (1825~1896) 1845年ヴァーモント大学を卒業後2年間高校教師。アンドーヴァー神学校とオーバーン神学校（Auburn Theological Seminary）で神学を研究、1852年卒業。同年母校ヴァーモント大学で英文学の教授の地位を与えられ、ドイツ留学後1857年ラテン語をも教えるようになる。1863年ニューヨーク州のユニオン・カレッジの論理学、修辭学および英文学の教授になったが、それに先立って、1857年按手札をうけた。

1865年アメリカン・ボードの総主事 (a corresponding Secretary) に選ばれ、翌年外国通信部 (the foreign correspondence) の全責任を引き受けた。その後14年間外国部の重荷を唯一人で負ってきた。1894年ボードの年会で辞表を提出するまで29年間ボードに奉仕した。クラークの行政を最も顕著に特徴づける2つの出来事はジャパン・ミッション (the Japan Mission) (1869年開設) と婦人宣教師部 (the Women's Board of Missions) をつくったことである。 (『新島襄 人と思想』 p.84)

資料

北川晃二著『太一郎物語』(東京：株式会社 オリオン社、昭和38年)

森永太一郎翁顕彰会『いまりが生んだ偉人 森永太一郎伝』(佐賀県伊万里市：顕彰会事務局、昭和62年)

日本経済新聞 2000年(平成12年)3月12日(日曜日)

森永太一郎、松崎半三郎著『パイオニアの歩み 現代語版』(東京：森永製菓株式会社、平成4年)

若山三郎著『菓商 小説 森永太一郎』(東京：徳間書店、1997年)

『菓子新報 青年版』

『森永太一郎氏 信仰実験談』(東京：教文館出版部、昭和7年)

『森永五十五年史』(東京：森永製菓株式会社、昭和29年)

『森永製菓100年史』(東京：森永製菓株式会社、平成12年)

新島襄編集委員会編『新島襄全集』(京都：同朋社、1985年)

同志社社史資料室編『同志社談叢』

北垣宗治著『新島襄とアーモスト大学』(京都：山口書店、1993年)

井上勝也著『新島 襄 人と思想』(京都：晃洋書房、1990)

本井康博著『新島襄と建学精神 「同志社科目」テキスト』(京都：同志社大学出版部、2008年)

学校法人 同志社『現代語で読む新島襄』編集委員会

『現代語で読む新島襄』(東京：丸善株式会社、2000年)

太田雄三著『新島襄』(京都：ミネルヴァ書房、2005年)

『聖書』(東京：日本聖書教会、1986年)